
「変わる」ことをおそれない現場とは

株式会社暁和 正月 聡

企業概要

名称	株式会社 暁 和 代表取締役社長 遠田 潔
所在地	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-6-4九段 プラザビル
営業品目	DTPデザイン、編集、分解、出力、製版、印刷、データベース設計・構築・運用、Web制作
取扱商品	一般書籍、雑誌、カタログ、学習参考書、名簿、統計資料、パンフレット、多言語組版、他印刷物全般
従業員数	男子23名 女子17名 計40名
創業	昭和44年10月23日
資本金	1,825万円

設備概要

文字入力・編集関係

Windows XP	12台
Macintosh (OS9)	40台
Macintosh (OSX)	45台

画像入力関係

SCREEN SG-8060 MarkII	1台
SCREEN SF-C5000PU	1台
SCREEN SF-C500RF	1台
SCREEN Gena Scan5500	1台

出力関係

Genasett 3075(B2)	1台
Digital Konsensus Premium	1台
Trueflow	2台
DocuColor1256 GA	4台
700 Digital Color Press	1台

品質管理関係

デジタル検版システム
納品データチェックシステム

プログラミングソフト・言語

EXCEL、ACCESS、FileMaker、桐
C、VB(VBA)、Perl、AWK、AppleScript、
REALbasic 他

組版関連ソフト(Mac)

Quark XPress Ver.3、4.1、6.5、7、8
Adobe InDesign Ver2.0、CS以降
Adobe Illustrator Ver5.5、7.0、8.0、9.0、10.0、
CS以降
Adobe Photoshop Ver3.0、4.0、5.0、5.5、6.0、
7.0、CS以降
FACILIS Ver.7

組織体系

営業部

受注業務、ディレクション業務(設計・提案)。

営業部業務課

顧客打ち合わせ、原稿管理、原稿手配(内部納期管理)、全体スケジュール管理(入出稿、校了下版管理)、最終納品データチェック、印刷への申し送り確認。

デジタル製版部

RGB CMYK変換、色補正・分解、切り抜き他、画像処理全般

デジタル制作部

隔週誌、月刊誌、Mook、シリーズ書籍、カタログなどのDTP業務全般
面付、フィルム出力、CTP用データ作成

システムプランニング部

自動組版(プログラム作成、データベース設計・構築、データ入力)
文字処理全般、プログラム処理全般
マイクロソフト系ドキュメント処理(DTP業務、各種集計業務、ドキュメント製版処理等)
DTP業務、面付、フィルム出力、CTP用データ作成

会議・委員会

〈経営会議〉

社長以下幹部による運営会議

〈営業会議〉

営業による、当月・翌月の売上予測、お客様情報の集約

〈早朝会議(下版・当日進行状況報告)〉

毎朝営業部と各部管理者(リーダー)による、当日の進行会議、前日の報告

〈品質管理委員会〉

各部から選ばれた委員(管理職でない社員)と品質管理部で構成。暁和の品質活動を行う

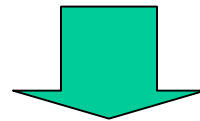
〈情報セキュリティ委員会〉

各部から選ばれた委員(管理職でない社員)で構成。社員・派遣社員・外部協力会社への啓蒙活動を行う。

ISO27001を維持継続し、暁和の情報セキュリティ事故を未然に防ぐPDCA活動を行う

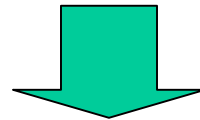
基本方針

- 1: お客様に喜ばれ、感謝される仕事をする(最低条件)
- 2: 他社が出来ない仕事をする(難易度、最適ワークフロー等)
- 3: お客様から選ばれる会社になる(管理力と現場力)



そのために……

お客様が困っていることを解決し、お客様の作業が軽減できるワークフローを築き、満足される製作物を納品する。



だから……

お客様あってのお仕事。お客様の要求、満足度、仕事が変われば、暁和も柔軟に対応できるようにしておくが重要。

今日に至る転機

現在も弊社は「変わる」ことで前進できました。アナログからデジタルへ、という流れの中、転機となる仕事がありました。

「官報」：業界全体を巻き込んだ、「官報」のXML化

「中古車情報」：自動組版したデータの画像トリミングプログラム

「ブランド雑誌」：CTS組版+製版会社十数社で行っていたアナログ製版(毎回校正毎)の自動組版化

「小学国語辞書」：改頁の少ない縦組み3段組

(文字流し込み+画像組み込み組版(成り行きで画像を埋め込む)を自動組版)

DBで管理した画像込み自動組版

最終DBからWeb用データ生成

色校正からカラーカンパ校正への変更

近畿圏へ宅配していた校正紙の流れを、リモートプルーフに変更

文字組版～画像張り込みの時間を原稿作成・校正に利用



スケジュールの短期化

最新情報の受付期間の拡大化

複数社に手配していたものを1社での製作に統合

暁和の考える「ワークフロー」とは

なぜ、そのやりかたをしているのか？

どこでやるのか(組織(内部・外部)・人)
いつまでにやるのか(時間)
どういったやり方をとるのか(技術)
いくら貰えるのか、いくら出せるのか(予算)

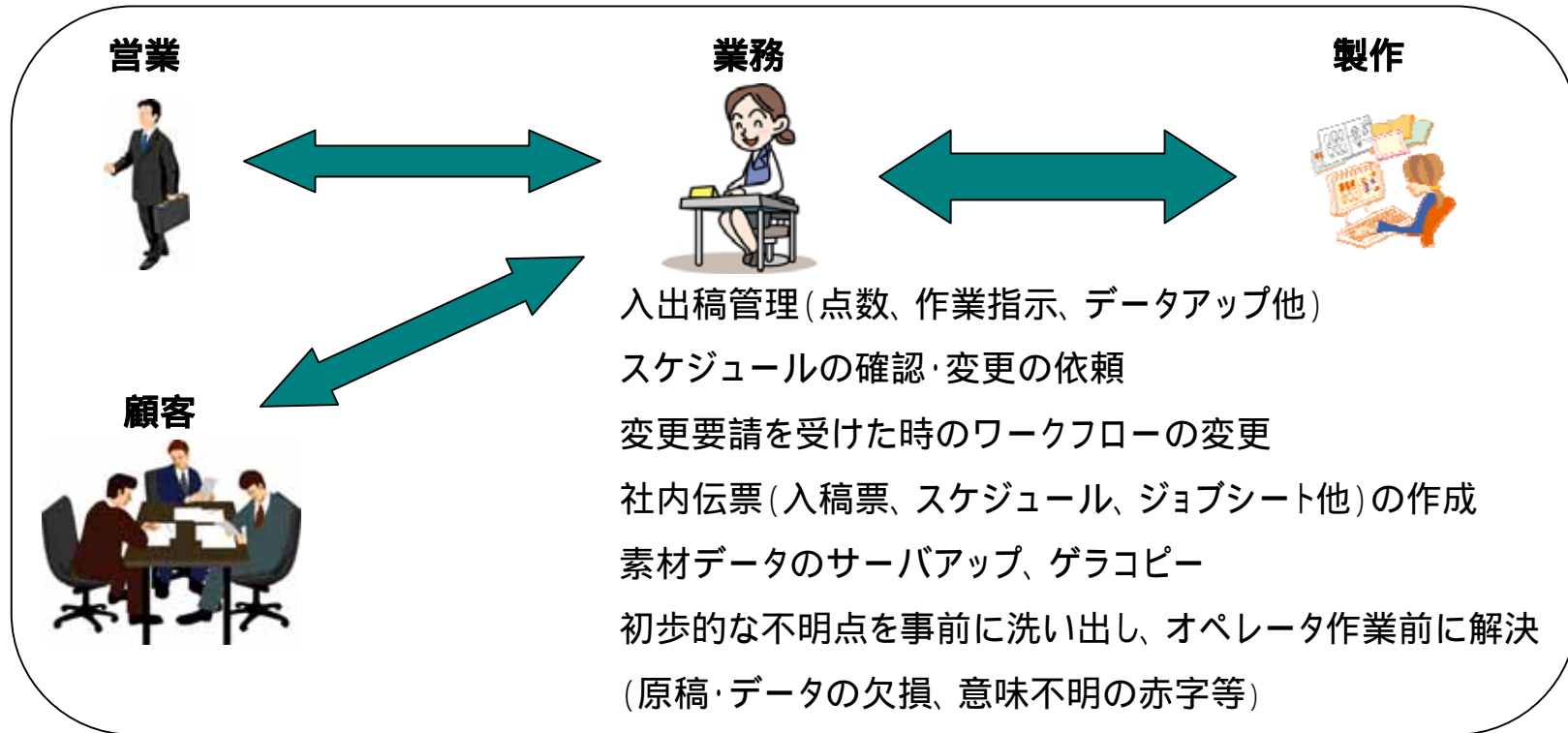
商品の特性
現在の状況
次回の予測
お客様のメリット(作業の軽減)
暁和のメリット(リスク回避)

“業務ごと”のワークフローの確立！！

ワークフローと言っても、高価な機器やシステムを購入して人を介在させずに業務効率をあげる方法がすべてではありません。

一つのやり方、いつもと同じやり方だけで業務を行っていても差別化は実現できません。

暁和ワークフローの要 『営業部業務課』



営業、製作のグレーゾーンになる業務を製作現場のオペレーターや担当営業が行うと、本来やるべきことに対して、「**出来ない口実**」にもなってしまいます。

営業と製作現場とが完全に区別されていると、スムーズな情報伝達が出来なく、効率の悪い結果となってしまいます。

お客様と製作現場との潤滑油

他社が出来ない仕事をするために



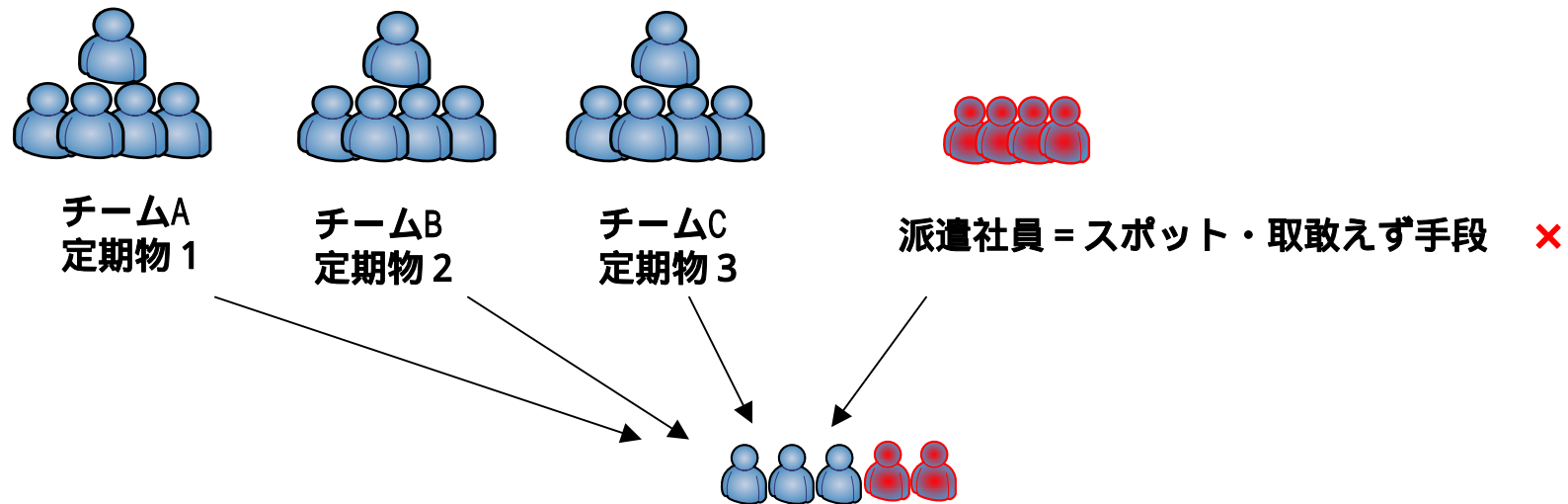
依頼を受けた社員一人では判断がつかない場合、各部管理者を招集

- ・ 依頼内容の説明（まず優先するのは何か（時間？、品質？、コスト？）、量は？納期は？）
- ・ 各部の状況確認（混んでいるのか、プログラムが絡むのか）
- ・ 依頼を受けた場合の状況予測（部署間でのやり取り、他商品への影響など）
- ・ 受け入れ出来る体制（ワークフロー）の内容の集約、担当者の選定

コップいっぱい詰まった砂も、ぐらぐら揺らせば隙間ができる Gyohwa
Electronic Data Makeup & Processing

「変わる」ことをおそれない現場 1

3つの製作チームとベテラン派遣社員



スポット案件・短納期業務受注時

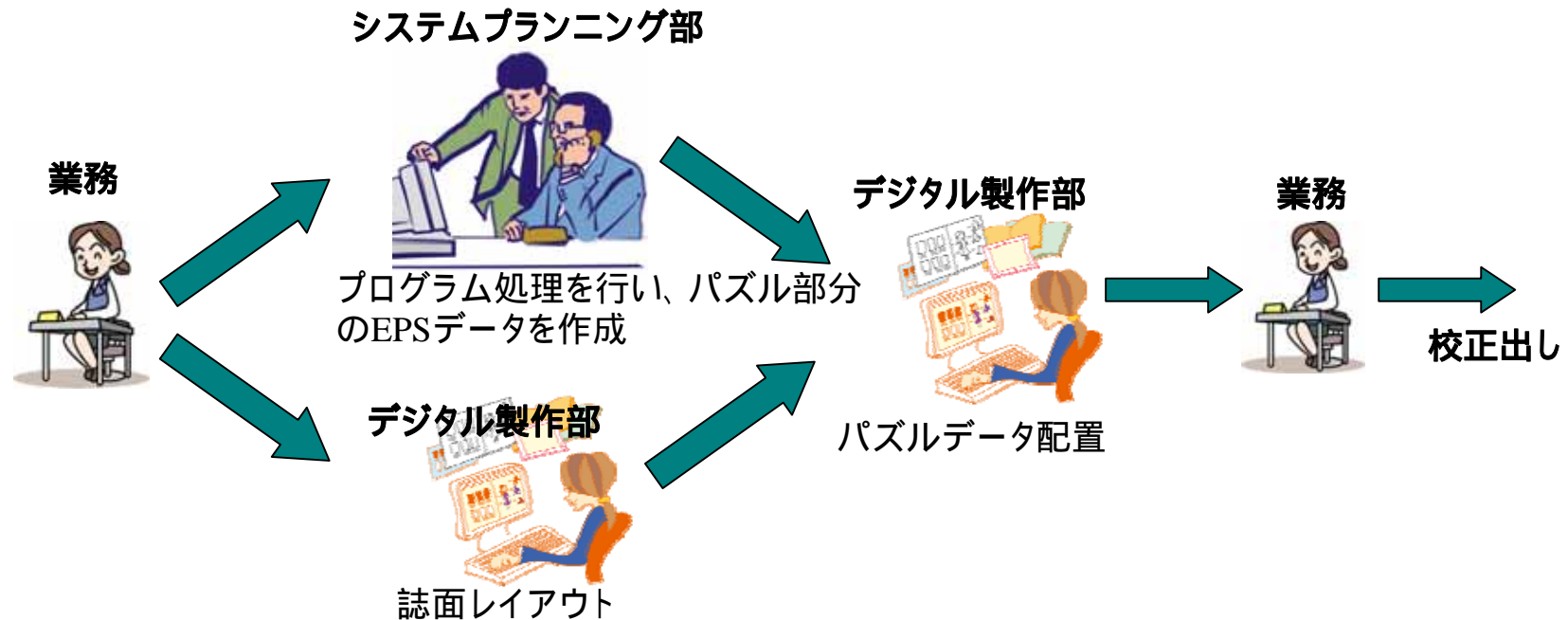
(得意分野・スキルに応じてチーム4を編成)

暁和で就業している派遣社員の内、6名は7～8年以上、その他の人でも2～5年以上勤務。暁和での仕事のやり方、内容に熟知している。アプリの使い方、フォントの選び方、ページの作り方、不明点の伝え方等、作業ルールが頭に入っているため、業務予想を立てることができます。

部署を跨いだ業務

パズル雑誌

1冊内に50～100件の問題と解答があり、ページ誌面(単ページ～見開き～観音)を短期間で作成。複数の媒体を取り扱っているため、営業部業務課の原稿管理とスケジュール管理が重要。

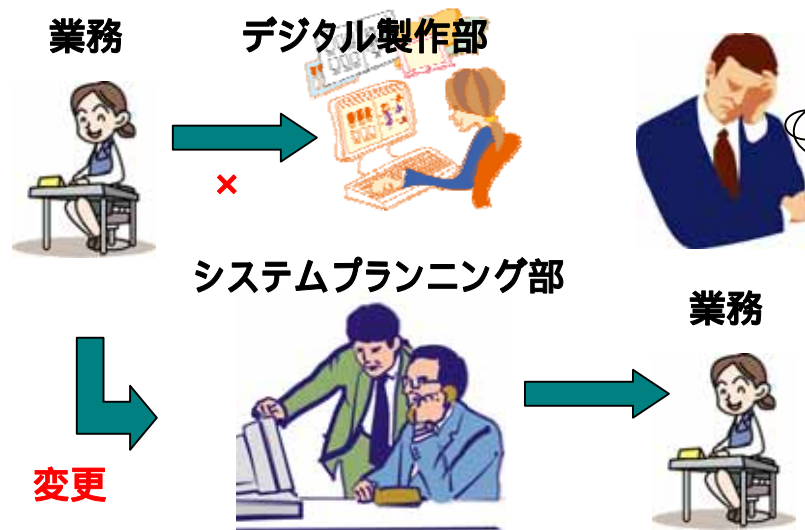


このワークフローにより最短の校正出しが可能に

効率を考える

ルビの規約が詳細に決められている仕事(縦組文庫本)

原稿確認時には、DTP業務としてデジタル制作部での業務として検討。ルビの振り方がルビ文字数によって、行頭の場合(行頭揃え)、行中の場合(センター揃え)、行末の場合(行末揃え)と違うアプリが持っているデフォルトの振り方では表現できないスタイルを作成し、その都度当てる作業。



一文字の修正が入っただけでも、今まで行頭にあったものが行中になってしまうので、以降のルビの振り方を全て変更しなくてはならない？当然、校正にはルビのデザインに関わる赤字は入っていない…。修正時間が予想出来ない…。修正したデザインが合っているのかどう校正する？

ルビの赤字修正はDTP作業として行うが、文字の移動によるルビデザインの変更は、修正後のドキュメントに対して、ルビデザインを変更するプログラムを当てることにする。

一貫した作業体制を構築するため作業部署をシステムプランニング部に変更。

次フェーズも視野にいれる

日本史の参考書

総ルビに近い組版という以外は、DTP作業としてデジタル制作部にて進行。通常のルビ振り作業がある商品であれば、DTPオペレーターがルビツールを使用することで問題ない。しかし、「総ルビに近い」なので、ルビの振られていない個所が複数ある。



通常の読み方とは違うヨミや、グループルビが多い。何回も同じルビが出てくる。入稿予定が複数回に渡っている…。

ルビ情報をDB化したワークフローをシステムプランニング部にて構築してプログラムでまずは総ルビにすればいいのでは？

システムプランニング部



基本ルビDB



デジタル制作部



ルビ付加テキスト
流し込み



業務



ただ処理をした、ただ作業をした仕事は次になにも残らない

現場主導で運用

月刊定期物

Qxドキュメントが先に存在し、後からデータベースが作成される。

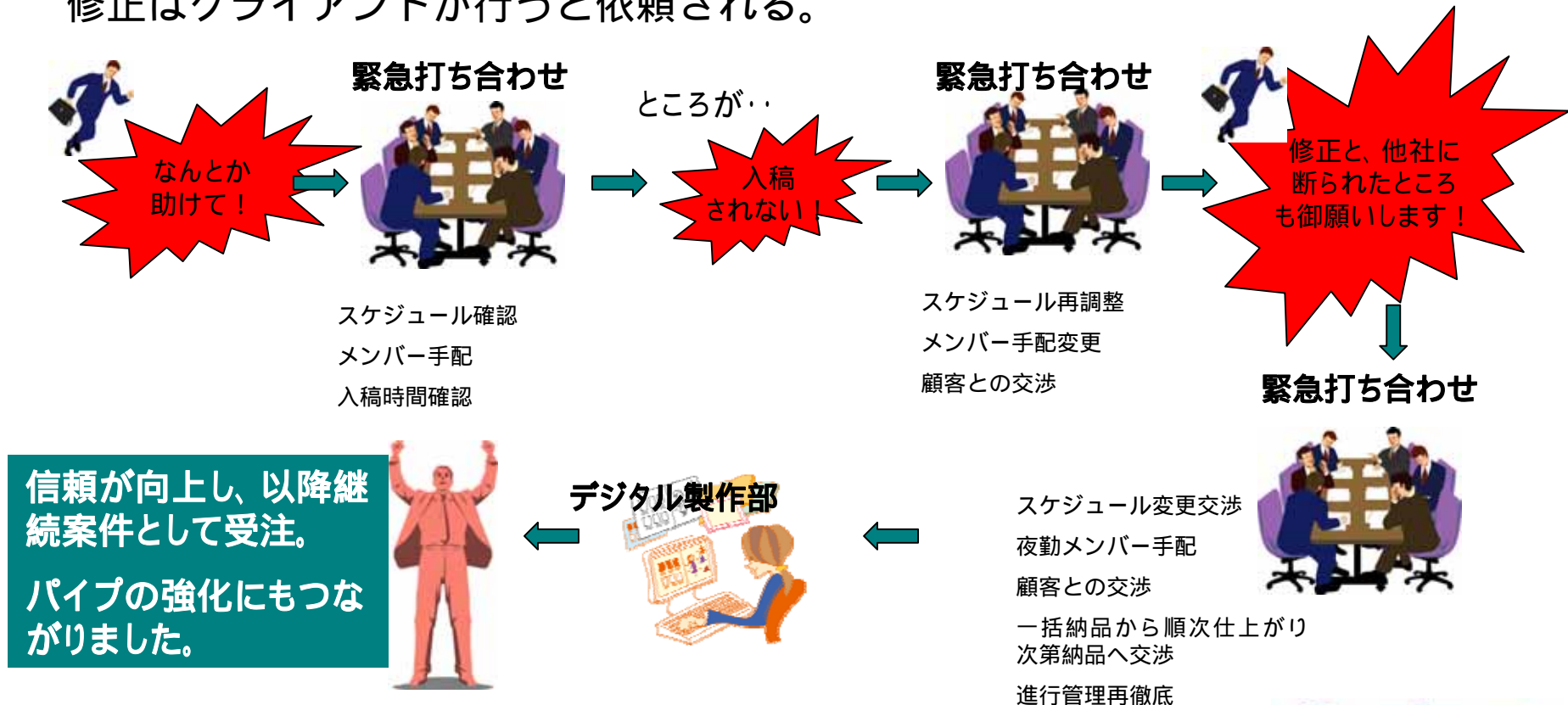
誌面デザインとデータベースの項目が一致していないので、直接の連動が出来ない媒体。更新したデータベースを毎月納品。本文500ページ中、毎月50～300ページ位修正が入り、DTP作業。ただし、全頁の下1/4スペースに広告が入る（入らない場合もある。）ので、その部分はプログラム処理。



データベース、自動組版など専門知識が場合や両担当者を通しては即時対応に答えられない場合は現場も窓口となります。

突然の依頼に対応する

クライアントは切羽詰っており、手持ちの原稿を今日・明日にも製作し出稿しなくてはならず、何とかやってくれないか、新規のみお願いしたいとのこと。修正はクライアントが行うと依頼される。



状況は刻一刻変化するもの

「変わる」ことをおそれない現場7

お客様ありきのオーダーメイド自動組版

たしかにExcelのデータがあり、定型デザインのコマがあれば自動組版として提案します。でもこれは、「社内の作業を軽減したいから」「自動組版じゃなくても、きちんとした組版をしてくれればいい」と言われることでもあります。しかし、本来提案したいのは、もっとお客様の作業も軽減できるようなお客様にも暁和にもメリットのあるワークフローです。

お客様の負担軽減のための手法

- ・新規レコード（データ）はマゼンタ表示する。
- ・流用データはブラック表示だが、前回下版データとの差異を示すデジタル検版を行ったカンプー式添付する。

これにより、お客様は新規レコードと修正箇所のみ校正できる。

- ・再校出しは全てブラック表示、初校データとの差異を示すデジタル検版を行ったカンプー式をここでも添付



```
<id@CDM>  
[@x20name]  
[@x37FxCV]  
<Char :=20>  
<idIDn=
```

コマスペックを並べる技術が自動組版ではない

まとめ

皆さまもすでに実践していることだったかもしれませんが、
「変わる」ことをキーワードに今回お話をさせていただきました。
「変わる」ことに注目されてきておりますが、
弊社にとっては「変わる」ことが通常と考えております。
今後も「変わる」ことで皆さまと成長し続けていければと考えております。



ご清聴ありがとうございました。